
ヤンデレ

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ

【Nコード】

N3340I

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

人が他人を愛し、壊れるときが一番美しいとおもいませんか？

愛ゆえの狂気

「愛してる愛してる愛してる……だから貴方が欲しい」
学校からの帰り道。逃げる俺、山下亮を幼馴染みの春日がセーラー服を真つ赤に染めて手には同じく真つ赤に染まった包丁を持ち虚ろな目をしながら追っかけてくる。

「どうしたんだよ！？なんで包丁なんてもってんだよ！？」

「貴方さえ手に入ればワタシは何もいらない……」

何かがおかしい。いつもなら他愛もない話で笑いながら帰るのに、今日はこんなことになっていた。

「だから邪魔者はいなくなればいい」

そんなことを言いながら薄く笑っている春日は既に幼馴染の春日ではなくなっていた。

「なんで逃げるの？もしかして由香のこと心配してるの？だったら心配ないよ。由香はちゃんとかえったから」

由香は俺が数日前に告白してOKをもらったクラスメートだ。家が近いから由香とは一緒に帰る約束をしていたが由香が来る前に既に狂ってる春日が来たためにこうなってしまった。由香のこと心配してる？ちゃんと帰った？そんなはずはない。由香のはいつているソフトボール部はまだ活動してるはずだし、なによりさっきまで俺は由香が部活をしてるのをこの目でみていたのだから。

「だから一緒に帰ろ」

真つ赤に染まったセーラー服を着てさらに包丁を持ちながら追いかけてくる女の子と一緒に帰るのは何があってもごめんだ。

普段ならこれくらいの皮肉を言うことくらい出来ただろう。しかしそんな余裕は俺にはなかった。

どのくらい逃げただろう……気が付いたら俺は自分の部屋のベッドで横になっていた。

よ？由香はちゃんとかえったって」

「それはありえない！俺が帰る１０分前に由香は部活してんだよ！最終下校時間までまだ余裕があった！まだ部活をしてるやつがどうやって帰ったんだよ！？」

そう言っていると春日は薄く笑いながら俺を虚ろな目でしっかりと見た。

「亮くんは勘違いしてるよ」

「何をだ！？」

「ちゃんと由香は還ったんだよー土にね」

「なっ…！？」

あまりの春日の発言に俺は言葉を失った。

「だから邪魔者はいなくなったの」

春日は二の句を告げない俺の顔を自分の顔を近づけながら、優しく、そして残酷に言った。

「これからはずっと一緒だよ。だからもう何処にもいかないでね…
そしてワタシだけを見ていて…」

禁忌

「兄さん……！なんで私の愛を拒絶しておいて紫苑さんのは承諾するんですか……！」

そう言いながら実の妹である菜緒は椅子に縛りつけられた俺、深瀬紳助を睨みつけていた。

「一体何の事だよ！？てゆうかこれさつさとほどけよ！」

「私の質問に答えて下さい！なんで私の告白は断っておいて紫苑さんののは受けたんですか……！」

「お前には関係ないだろ！いいからさつさとほ——」

「関係あります……！どうして……私が兄さんをこの世で一番愛してるのにどうして私の気持ちに気づいてくれないんですか……！」

言いたいことは分かる。だがそれは間違っている。そのことに菜緒は気づいていない。いや気づいてるが認めたくないのかもしれない。「俺はお前を愛している。それはま——」

「それは『家族』としてでしょう！私はそんな小さな存在にはなりたくない！私は……私は兄さんの全てになりたいんです！どうしてわかってくれないんですか……！」

俺の言葉を封じ到底俺には理解できないことを言った菜緒は泣いていた。まるで駄々をこねる幼児の様にその目は潤んでいた。

「それは違う」

そのたった一言で全ては終わる。菜緒が廃人になるかならないかの違いはあるだろうが確実に終わるだろう。

「……しょうがなかったんです……兄さんが振り向いてくれなかったから……」

「菜緒、お前のやってることはま——」

「何も間違っていないません！これは必然です……！」

結論を言う前に菜緒は俺の言葉を最後まで聞かずに自分の行為を肯定した。

「何で分かってくれないんですか、兄さん!？」

普通に話し合っていれば何もなかっただろう。だがその時俺はあまりのしつこさに自分でも驚く程いらついていた。

「分かるわけないだろ…！俺とお前は血の繋がりをもつ実の兄妹なんだぞ！『家族』以外の愛しかたなんてありえないんだよ！」

「兄さん、それは一般論です！何で自分に素直になれないんですか!？」

「なれるわけないだろ！俺は紫苑のことをあー」

「あの女のことは言わないでください」

今までの菜緒の声とは違いました。と云っていいほど感情が感じられなかった。そのおかげで俺は落ち着けたが同時に恐怖すら感じた。

「兄さん、あんな女の話をしてください。兄さんには私がいるんですから…！」

そう言うとき菜緒は俺に顔を近づけてきた。

「そう…私がいるんですから…」

そのまま俺の頬を両手で押さえ俺の唇と自分の唇を重ね、そのまま俺の口の中に舌を押し込みかきまわす。どのくらいだっただろう？菜緒は息切れするくらいそれをつけ、離れた時に名残惜しそうに俺の唇を見てから自分の唇を指で撫でた。「大丈夫ですよ、兄さん。すぐ兄さんの一番になりますから…」

そう言いながら菜緒はまるで恋人と向かいあつたみたいに頬を紅潮させて俺に微笑んだ。だが俺は気づいた。菜緒の瞳にはうつすらと殺意が渦巻いていたことに…

見えない影

何かがおかしい…。ボク、笹倉茂がそう感じたのはここ数週間前からだ。学校に登校してる時、下校してる時、友人とゲーセンに行った時、ボク一人で買い物に行ったときなど外出した時にたまに誰かの視線を感じ始めた。最初は自意識過剰かなと思っていたがだんだんとボクの行く先々で必ずその視線がボクを見ている。更には二日前から登校する直前と下校した直後にピンポンダッシュをしている。何のためにこんなことをするのかこの時ボクはまだ理解できなかった。

「センパイ」

「茉奈、どうしたんだい」午前中の授業が終わり暇を持て余していたためたまには一人でゆっくりと読書でもしようと思いい図書館に向かっていた途中、後ろから部活（文芸同好会）の後輩である真鍋茉奈が満面の笑みで大きく手を振りながらボクの方に走ってきた。

「偶然にもセンパイを見つけたから走ってきたっス！」

周りから見れば茉奈がボクに少なからず好意を抱いてるように見えるらしい。何故なら彼女自身は「尊敬するセンパイだからたとえセンパイが遠くに旅立とうが気持ちだけはいつも一緒っス！」等と学校中に聞こえるのではないかと思うぐらいボクの教室内で大声で叫んだこともある。そのためボクは茉奈の気持ちに応えてあげない駄目男と言われるようになった。

「ところでセンパイは何処に行くつもりだったんスカ？」

「いまから図書館に行くつもりだったんだけど…一緒にくる？」

「もちろんいくっス！アタシはセンパイが行きたいと言ったらたとえ火の中水の中、地獄の果てまでついていくっス！」

今時の女の子がよくそんなことを恥ずかしがらずに言えるなと苦笑しながらボクはどこかその言葉に何か不安を覚えた。

「じゃあ、×切を今月末にするからみんなそれぞれくじに書いてあったテーマを書いてくる様に。お疲れ様！」

部長のその一言でそれぞれが下校の準備をし始めた。「センパイ。センパイのくじ、なんて書いてあったんスか？」

「ボクはホラーって書いてあったよ。茉奈はなんだったんだい？」

「アタシは恋愛って書いてあったス！アタシも小説の様なあまゝい恋とかしてみたいス！」

そんなことを言いながら頬を紅潮させている茉奈を見ながらボクは笑った。

『茉奈の日記』 6 / 13 (木)

今日も朝一で笹倉センパイの顔が見たかったからいつも通りセンパイの家のチャイムを鳴らしに行った。電信柱の影でセンパイの姿を見たときはもう最高の気分だった。

センパイの見えない退屈な午前中の授業が終わりセンパイを捜しに行ったら第二練の渡り廊下でセンパイの姿を見つけた。いつもは教室でのんびりしているから遠くから眺めていることしかできないけど今日は堂々と一緒にいても大丈夫だと思いセンパイに向かって走っていった。更にセンパイが『いまから図書館に行くつもりだったんだけど…一緒にくる？』なんて誘ってくれた時はもう死んでもいいぐらい気持ちよかった。部活中はセンパイの悩んでる姿を久しぶりに見れたので退屈はしなかった。次の作品のテーマが『恋愛』だったので凄くラッキーだった。センパイとアタシをモデルにして書くのかなあ。帰り道ではセンパイにバレないように電信柱の影からセンパイを追ってた。特に何もなかったけどセンパイを見ているだけでアタシはいつも幸せな気持ちになれる。そうだ！今度センパイの部屋に盗聴器を仕掛けよう。合鍵もあるしセンパイが出掛ける姿を見れないのは残念だけどそのあとセンパイの声をずっと聴いてられるから良しとしよう。

壊れた心

「やっと二人つきりになれたね……」

僕―永倉太一は拘束されていた。正確に言えば帰宅中に何者かに首にスタンガンを押し付けられ、次に気が付いた時には見慣れない天井と見慣れないベッドの上に四肢を縛られて寝かされていた。そして僕が目覚めてすぐにドアから同じクラスの長谷川美琴が入ってきた。

「は、長谷川さん？ここは？」

「わたしの部屋だよ」

即答。

「な、なんでこんなところに？」

「道に倒れてたのを見たから安全な所に運んできただけだよ」

即答。

「じゃあどうして僕は手足を縛られて動けないようになってるの？」

「だって縛ってなかったらすぐに帰っちゃうでしょ？」

即答。

「な、なんで？」

「大好きだから」

悪びれもなく即答。

「それだけじゃダメかな？」

まるで世界が全て正義だと信じてる子供のように微笑みながら彼女は言った。

「理由になってないよ！僕はなんで手足を縛られてるかが知りたいんだよ！」

そうゆうと彼女は腕を組み首を傾げ考えこんでしまった。数秒考えた後、彼女はにつこり笑いながら僕の方を向いた。

「簡単に言うって誰にも邪魔されなくなかったから、二人つきりになりたかったからかな？」

「それだつたら僕に『話がある』って言えばよかったよね？」

「話があるんじゃないくて、ただ太一君とずっと一緒にいたいんだよ」
僕は直感した。

― 何かがおかしい―

そう思うと同時に友人の川神の言葉を思いだした。

『絶対に一人で帰るな。必ず俺に言え』

こうゆうことだったのか。川神は全てとは言わないが長谷川がおかしくなっていることをしっていた。

「ところで今何時？」

「わたしと太一君が一緒にいる。それだけで充分だよ」

遠回しに言っても無駄のようだ。

「そろそろ帰りたいんだけど」

「それはダメ。わたしは太一君といつまでも一緒にいたいんだよ」

冷たく突き放したらどうなるか分からない。でも遠回しに言っても無駄だろう。「どうしてそんな難しい顔してるの？」

僕が必死に言葉を探してると彼女は顔を覗き込みながら尋ねてきた。

「いや…」

言いよどんでいると長谷川さんは何か納得したような顔を見ると嬉しそうにこう言った。

「わかった！言葉にするのが恥ずかしいからそんな顔してるんだ！大丈夫！私は太一君のためならたとえどんな激しいことだろうとしてあげるから！そう…どんなことだって…」

そこまで言つと頬を赤く染めて焦点のあつてない目で天井を見つめた。

「…いい加減にしてよ」

「えっ？」

「僕のが好き？いつまでも一緒にいたい？どんなことでもしてあげる？僕はそんなこと望んでいない。僕は自分の好きになった人と一緒にいて、その人と幸せになりたいんだ。長谷川さん、いや君は僕に主体性を与えずに一方的に愛してるだけだ。その先には幸せ

なんてない。あるのは苦しみと悲しみだけだ」

「しょうがないよ！！太一君がスキなんだもん！！世界の誰よりもスキなんだもん！！もう手段とか選んでられないほどスキなんだもん！！」「だったら…なんで直接僕に言わなかった？」

「っ！？それは…」

僕の言葉に長谷川さんはたじろいだ。そしてうつ向き黙ってしまった。

「直接僕に言えば僕だって君を好きになれたかもしれない。でもそんなことをしなかったから君は僕に嫌われた。君を好きになる機会は君によって失われた」

「…うるさい」

うつむく長谷川さんの頬に一筋の水滴が流れた。

「わたしがどんな気持ちでいたか分からないくせに分かったような口きかないでよ！わたしは怖かったの…いつも太一君のそばにはたくさんの友達がいて、わたしが告白してもわたしじゃなくてみんなを選ぶことが怖かったの！…だから、だから」

そのまま僕の胸の上で泣き出してしまった。

「うわああああ…あああ…ひっ…あああああ！」

「君が手を縛ったせいで僕は君の涙を拭うことさえ出来ない。悲しむ君を優しく抱きしめることも出来ない。君が悲しむのを黙って見ていなければならぬのが悲しい」

その言葉を聴いているかどうかは分からないが僕は長谷川さんに素直な気持ちを言った。

やがて落ち着いたのか泣き声を上げずにすすり泣き始めたのを確認してから僕は彼女に話し掛けた。

「だからやり直そう」

「…ひつく…えっ？」

その言葉を意外と思ったのか長谷川さんは泣き腫らした顔を上げて僕を見た。

「今日のことはなかったことにして明日からいつも通りの日々に戻ろう」

「……」

長谷川さんは黙って僕の話聴いていた。

「そして明日でも明後日でもいい。僕に告白すれば」

「……いいの？」

「えっ？」

「……なんでそんなに優しいの？」

僕を見つめる長谷川さんは泣きそうになりながら訊いてきた。そんなのは決まってる。たとえ鈍い笹倉だろうと僕の彼女に対する気持ちは分かるだろう。

「好きだったからだよ。いや好きだから方があってるかな」

僕の台詞に長谷川さんは驚いたのか口を半開きにしながら僕を見つめた。

「去年の文化祭を覚えてる？あの時僕のクラスの出し物だったボウリングで君を対応したときに君の姿、声、雰囲気招惹かれたんだ。でも仕事が忙しくて君の名前を聞くのを忘れちゃったんだ。それから大変だったよ。なんせ君のクラスはもちろん名前すら分からなかったんだから。諦めかけたら今年、同じクラスになつて話す機会が出来た。友達にもなれた。でもいざ伝えようと思つたら話しかけることすら出来なくなつた」

「……同じ」

「何が？」

「私も太一君と同じだった。去年の文化祭で太一君のクラスに行つた時に対応してくれた人が親切でいい人だなつて思つたの。それから毎日その人のことばかり考えるようになった。それから太一君のクラスにいる友達に訊いて名前を教えてもらったの。でも会う時間もなく半ば諦めてたら同じクラスになれた。友達にもなれた。でもいざ想いを伝えようと思つたら急に恥ずかしくなつてダメだった」

彼女も僕と同じで怖かったのだ。フラレたらどうしよう。今まで
は友達として話せたけどダメだったら話すことも会うこともダメに
なる。それがイヤだったんだ。

「僕たちって両思いだったんだ」

「…うん」

僕を見る彼女の顔にはもう涙なんてなかった。悲しみなんてなかつ
た。あるのは喜びだった。笑顔だった。僕はそんな彼女を見ながら
川神がその後と言った言葉を思い出した。

『人が壊れるのは人に想いが届かない時だ。だがその想いが届けば、
あるいはその人が気付けば人はまだ人として生きていける』

あの時は何のことか分からなかったが今なら分かる。長谷川さんの
心と僕の心が繋がったのだから。

携帯の向こう

新着メール56件

またか…

そう思いながら俺、堺司は携帯を開き新着メールを確認した。

件名『愛してる』

『貴方を愛しています』

件名『愛してる』

『貴方を愛しています』

件名『愛してる』

『貴方を愛しています』

新着メールにはすべて同じ件名と文章が書いてあった。しかもこのメールが来始めたのはもう5日も前からである。更に初日は1件だけだったから気にしなかったが日毎に件数にだんだんと増えていき5日目の今日には50件を超えるようになった。

「いったいどこのどいつなんだよ…」

「フフツ、司君、返信くれるかな…」

そう言いながら篠原千佳は自分の想い人である堺司にメールを送りまくっていた。しかし自分のアドレスは司には教えてない。更に彼のアドレスを教えてもらってない。それどころか同じクラスだが何か用事ない限り話さない。否、話せない。話しかけようとしても話すことができない。たまにチャンスがあっても自分の心の準備が出来なくて話せないか心の準備が出来ても遅すぎてチャンスを自ら失うかだった。しかし6日前に偶然にも彼の携帯の画面が見え、アドレスまで見えた。千佳にはそれが神様が与えてくれたチャンスだと思いい、得意の瞬間記憶で司のアドレスを覚えた。それから家に帰り、司にメールしようとしたがどうしても決心がつかない。ようやくついたのは朝日が昇った時だった。彼女の願いは司にメールの返信を

してもらったことだ。だが誰が知らないアドレスに返信するだろうか？彼女はそれに気付いていなかった。

「なんで返信してくれないんだろ？…そうか！私の愛が足りないからか！」

そう納得し現在にいたる。

その日の学校は司にとって退屈、否、まったく考える気がなかった。

友人に相談しても「無視すりゃいいじゃん」等とまるで他人事のよう言われる始末（実際その通りだが）。

「どうすりゃいいんだよ…」

「どうしたん？」

誰にも聞こえないぐらいの声で呟いたが、放課後の今この教室に残っているのは俺の他に数名のクラスメートだった。しかもほとんど喋ってないため独り言は筒抜けだったらしい。

「何か悩みでもあるの？よかったら相談にのろつか？」

しかも俺の独り言に興味を持った変人はクラスでも美人と評判がいー那波樟葉だった。

「いや、たいしたことじゃないんだけど」

「自分でたいしたことじゃないって言う奴に限って大きな悩みをもってるもんなんだにや」

「なんだよその語尾は…そうじゃなくてスゲーなお前、そんなこと分かるなんて」

「ふっふっふっ、女子の悩みをいくつも聞いてきた私には当たり前なのだあ！」なるほど、それなら納得できる。

「してどんな悩みなの？」その日以来俺と樟葉はよく話すようになり、メアドも交換するまでに至った。

その日篠原知佳は楽しそうに話している（悩み相談だから楽しくは

ない）堺司と那波樟葉を見て二人を睨みながら自らの爪を噛み締めていた。

「なんであんな女にひかれちゃうのよ…!？」

樟葉に悩みを打ち明けてから二週間が過ぎた。樟葉はここ最近休みがちだった。「風邪かな？」

そう思い昼休みに樟葉に

『お前バカの癖に風邪でもひいたのか（ω_）』とメールをした。

「フツ、樟葉さん、アナタの大事な司君からメールが届いたわ」「んー、んー!!」

その頃樟葉は家にいた。だが彼女は断じて風邪などひいていなかった。彼女は千佳によって監禁されていた。樟葉は高校に入ると同時に一人暮らしを始めたため家には彼女しかいなかった。そこを千佳は利用した。相談があると嘘をつき、樟葉の住む家に入った。そこでもっていたスタンガンを樟葉に押し付け気を失わせた。既に監禁されてから三日がたっている。その間ずっと千佳は彼女の前に座っていた。

「どうしようかアナタの意見が聞きたいわ」

そう言うと千佳は樟葉の口にはっていたガムテープを勢いよく剥がした。

「…っ!？」

あまりの勢いに彼女は痛み到我慢できず、軽く悶えた。「アナタの悶える声も良いけど、今アタシが聞きたいのはアナタの意見よ。早く言いなさい」

「堺君には何もしないで…」

「ふーん、じゃあアナタには何してもいいのね？」

「えっ？」

「爪と肉の間に裁縫針を刺したり逆さ釣りにして冷水ぶっかけた後割れた竹刀で殴打したり洗濯板の上に正座させて足の上に重石をの

せたり手足を錐で貫いたり金槌で潰したり焼けたフライパンを身体中に押し付けたり包丁でズタズタにしたり腹を開いて腸を引きずり出したり……何してもいいのね？」

千佳は耳まで裂けるのではないかと思うぐらい口を歪めた。それを
見た樟葉の顔からは血液がサツと退いた。

「イヤ！やめて！そんなのイヤ！」

「黙れ、じゃあまずはこの五寸釘を右手小指第一関節から……！」

「おっ、樟葉からだ」

「遅くなってごめんね（＜人＞）今まで寝てたから返信遅れちゃった」（――）；

大丈夫だよ！すぐに治して行くからね（、、、

見解

—もう5日か—

俺、川神宗一郎が考えたのは既にいなくなつて5日になる友人の山下亮とその恋人の榊原由香、そして亮の幼馴染の春日忍の行方だった。クラスの女子共は『愛の逃避行』や『駆け落ち』など下らない妄想をしているが俺は納得しない。第一にたかが一高校生である山下亮と榊原由香がそこまでする必要がない。ましてやそれでは春日忍の行方は説明できない。第二に俺は山下がそんなことできないのを知っている。山下はかなりの常識人だ。たとえ一時的な衝動に駆られてもすぐに思い直すだろう。第三に山下の家には財布、携帯は置いてあつた。つまり一度家には帰っている。家に侵入出来る者が拉致をした可能性が高い。しかし誰がそんなことをしたんだ。俺の中の仮定では春日忍が最も黒に近い。春日は山下の幼馴染だ。そのため一番山下の油断を誘い易い。理由も山下が榊原由香に告白してOKをもらい恋人になったことに嫉妬したと言えば少し強引だが説明がつく。だが春日が榊原も一緒に拉致つたことは説明がつかない。山下と一緒に拉致する必要がない。ほかつておけばよかった筈だ。……理解できない。

「また何一人でブツブツ言つてんだ？」

「ねえ、購買にパンでも買いに行かない？」

「どうやら少しばかり声に出てたらしい。だが恥ずかしさはない。聞かれてたのが女子共だったらすすが俺も恥ずかしいが友人である笹倉茂、堺司の二人なら俺の癖も知っているからいい。」

「分かつた」

菓子パンは糖分が多く、頭を働かせるにはもってこいだ。

「太一はどうする？」

「ごめん。屋上で美琴が待つてるから」

「そうかよ。俺達より女かよ」

「堺も大切な人が出来れば分かるよ」

永倉太一には最近彼女が出来た。どうやらあの時に長谷川美琴の壊れかけた心を直すことができたみたいだ。あの二人なら問題ないだろうと思いつながら立ち上がった時に二人の相談が頭の片隅に引っかった。

笹倉は最近家の外では常に誰かの視線を感じると言っていた。そういえば学校ではよく後輩の真鍋菜奈が近くににいるな……。今度探ってみるか。

堺は毎日迷惑メールが送られてくると言っていたな。そのせいで今週だけで三回メアドを変換してたな……。メアドが変わってもすぐに確認出来る……。

うちのクラスメートがやってる可能性が高いな。

「……そういえばもう一人来なくなった奴がいたな。名前は確か……」
「司、最近お前が相談してた奴の名前はしってるか」「相談してた本人だから知ってんにきまってんだろ、那波樟葉だよ。最近休みがちだけどな。それがどうしたんだ？」

「聞いてみただけだ」

「川神はいつも変なことに興味をもっちゃうからね」「否定はしないが肯定も出来ないな」

自分でも少々異質だと分かっている。だが分かっているから何だというのだ。

「いかん、考えがそれだ——思考を戻す。」

いきなり学校を休むのは悩み事がある年頃の女子なら分かる。だが那波樟葉は悩みはないはずだ。あっても学校を休む程ではないはずだ。では何故？風邪でもひいたならまだ分かる。しかし何故学校に連絡が無い？

「……那波樟葉が休みだした日に何があったかが解れば簡単に分かる……」
そこで一つ思い出した。

——確か那波樟葉は一人暮らしだったはず——

一度見舞いという形で様子を見に行くか。しかし何処に住んでいるか分からない。…しょうがない、那波の友人達に聞いて回って見るか。

放課後。俺是那波のよく話してた女子から家の場所を聞き、目的の場所に歩いていった。

―オゾン荘…誰がこんなふざけた名前をつけたのだ…また思考がそれた。もう少ししっかりしないといかんな。

目的の場所であるオゾン荘に着き、大家はクラスメートと言っただけで通してくれた。

―これじゃ何処の誰かわからなくても入れるな―

那波の部屋である5号室に着きドアをノックするが中から返事はない。それどころかドアノブにはうつすら埃すら被っている。

少々考えてから俺はドアノブに手をかけた。さすがに鍵は開いてなかったがそれぐらい想定内だ。俺は持つて来た針金を鍵穴に突っ込み鍵を突っ込んだ。やはりタイプが古いため簡単に開いた。

「川神宗一郎です。お邪魔します」

一様何かあるといかんで自分でも間の抜けた最低限の挨拶をしなから部屋に入っていく。だが部屋の主である那波樟葉の返事は聞こえない。それどころか一つも電気がついておらず全ての部屋からは人の気配が感じられない。

玄関から数歩行ったところで鼻に親しみがあながら不快な―鉄錆の臭いがした。

―この部屋か…―

臭いが一段と強くなった部屋のに那波がいることは想像出来る。しかしどんな姿をしているかまでは想像出来ない。ここまで鉄錆臭いのだ。最悪の結果も覚悟しておかないとならない。

ギィィィィ

まるで何年も使われてないような音をたててドアが開いた。ドアの向こうに仰向けに倒れていたのは既に腐敗を始めている那波の姿だった。

「…最悪の結末か」

予想より酷い殺られ方だった。両手にはびつしりと五寸釘が打ち付けられ、腕はズタズタに斬りつけられていた。さらには胴は胸から骨盤にかけて切り開かれ臓器は五臓六腑にぶちまけられていた。唯一顔が傷つけられてないのは死ぬ寸前まで恐怖と苦痛に歪む那波の顔を見るためだろう。

「…最悪の結末か…ヘドがでる」

那波の姿にはない。ここまで殺った犯人にである。早めに警察に連絡すれば犯人が捕まるかもしれない。とりあえず那波の横に正座し黙祷を捧げる。数秒後、俺は携帯を取り出して何枚か写真をとり、電話をかけた。

「もしもし…ああ俺だ。…そう、殺人だ…そうだなあ40万でどうだ。…分かった今から向かう。ああそうだ雪奈さんにお茶はいらないって言うておいてくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340i/>

ヤンデレ

2010年10月10日17時37分発行